



被爆体験記を朗読
して10年
口和本の会

左から岩瀧朋子さん、花本
弘子さん、川崎弘子さん

核の惨禍と戦争の悲惨さを後世に 確実に伝えるために語り続けます

「被爆で本当に苦しんだ方は、あの体験を語ろうにも胸が詰まり、とても語ることもできないんです。そういった方々の声にならない言葉を、私たちが伝えていかなければいけません」。そういった強い思いで活動してきた3人。

今、危機感を募らせていることがあります。それは、戦



6月30日、東城文化ホールで行われた被爆ピアノコンサートに招かれ朗読する口和本の会の皆さん。

「被爆から70年という節目が重なった今年、会の活動を振り返り改めて心に誓うことがあります。平和の大切さ、核廃絶の願いを、平和な未来をつくる子どもたちに伝えたい。その思いを胸に、精一杯の活動を続けていく決意です。

「子どもの頃になかなか理解ができなくても、私たちが伝えたいことが何だったのかを成長したときに感じてくれればと思っています。微力ですができる限り続けていきたいと思っています。核兵器の非人間性と戦争の悲惨さを後世に確実に伝えるために。」

語り継ぐ 人たちがいます



中学生らしき男の子は、ちぎれた片腕を抱き、体中やけどだらけで梶本さんの前で力尽きたそうです。写真に合わせて、ゆっくりと丁寧な語り口で来場者を引き込む藤本さん。

終了後のアンケートでは「真に迫るお話は心に響くものでした。被爆の実情はずつと次世代に伝え継いでいかなければならないと思いました」

た。自分の子どもにも平和の尊さを伝えていきたい」という声など、ほとんどの人が聞いてよかった、関心が深まったと回答しています。

こうした関心を持つことが何より大切だと藤本さんは呼びかけます。「これから生きる若い人に、戦争も核兵器もない平和な世の中を生きていつてほしいと心から願っています。そのために私たちは

何ができるでしょうか。いろいろな方法があると思います。まずは関心をもってください。原爆とはどんなに恐ろしいものか、平和とはどんなに幸せであるものなのかを知ってください。そこから自分の周りの人へ知ったことを伝えてください。より多くの人が事実を知ることが、核兵器根絶、平和への第一歩になると思います。」

特集

70年目の夏

～あの日の実相を伝え継ぐ～

被爆・終戦から70年。
生きながらえた人は、夏が来るたびに地獄のようだった当時のことを思い出すといいます。
戦争・被爆の苦しみは今も消えません。
世界では今もなお多くの紛争が起き、多くの尊い命が失われています。
この節目に、改めて命と平和の尊さについて考えます。

市は7月9日、人権啓発セミナー（平和セミナー）を開催。被爆体験伝承者の藤本敏恵さんが、「語り継がれる被爆体験」戦後70年の今、あの日の出来事を伝えるために」と題し、被爆者梶本淑子さんの実体験と想いを語りました。

日本の総人口約1億2707万人のうち70歳以上の方は約2383万人（平成26年9月15日現在・総務省報道資料）、割合にして18・7％です。単純に見て、日本人の約8割が戦争を知らない計算になります。

戦時を知る人が刻一刻と少なくなっていくなか、戦争・被爆体験を語り継ぐことが大きな課題となっています。私たちにできることは、どんなことでしょうか。



「8月6日8時15分、広島市に原子爆弾が投下され、町は一瞬にして破壊されました」。スクリーンに映し出された「きのこ雲」のスライド写真の前に、藤本敏恵さんは静かに語りだしました。

兄、叔母を原爆で亡くし、両親も被爆している藤本さん。高校生の頃から「被爆二世」を自覚し始めたといいます。藤本さんは導かれるように、広島平和記念資料館で解説などを行うピースボランテニアなどの活動にも関わるようになりました。

この活動を通じて感じていることが、言葉で伝えることの難しさです。「瓦の下敷きになった人々がいた」と説明しても、瓦がどんなものか分からないという子どもが増えていること、そして、音やにおい、声などは言葉では表現しきれないのだといいます。

それでも藤本さんは、声で伝えるということが重要だと考えています。「難しいことですが、相手の顔を見て声で伝えることで、心に響くものがあると思います。」

ふじもと・としえ 藤本敏恵さん

プロフィール
1948年生まれ。北広島町出身。兄と叔母を原爆で亡くし、両親も被爆。平和祈念資料館を訪れる人々へ展示資料の解説などを行う、ピースボランテニアの活動を経て、本年4月から被爆体験の伝承活動を開始。被爆者の梶本淑子さんの被爆体験と反核平和の意志を伝えるため、日々精力的な活動を行っている。

一人一人が関心を持つてほしい
そして自分のできる方法で
平和を訴える声を広めてほしい

今、被爆者団体は岐路に立たされています。高齢化と会員減少によって、組織維持ができなくなっているからです。

今年で結成59年目を迎えた西城町原爆被爆者友の会。結成した昭和31年当時、会員は約450人いましたが、今年102人にまで減少しました。思うような活動ができず負担も増すばかりの現状に、これ以上は限界と判断した同会は、本年7月16日の総会で解散することを決めました。

会長の竹下敦さんは「解散の危機は以前からありましたが、被爆70年までは頑張ろうとやってきました。全国にある被爆者団体の存続も時間の問題です。実際に活動できて



7月16日に行われた西城町原爆被爆者友の会の最後の総会。多くの報道機関が取材に訪れ、解散を報じた。

平和への 思いをつなぐ

いるのは広島と長崎しかない状況。残念でならない」と声を震わせます。「戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさを伝える責任がある」と語り、活動が続けてきた竹下さんも84歳。かつてのような元気はなくなったと言います。

しかし、被爆体験を語り継がないといけないという思いは今も変わりがありません。副会長の下田一三さんも「精神的にも肉体的にも苦しんで生きてきたなかで、70年本当によく生きたと自分でも思う。解散は寂しいが、会がなくなっても核兵器は絶対な



たけした・あつし
竹下 敦さん

くすという思いでこれからも活動してきたい。平和のために力を尽くしたい」と目を潤ませます。

そうした思いの中で同会は、解散前の最後の取り組みとして、同会が昭和55年に発行していた被爆体験記「夾竹桃」を復刻させました。「1人でも多くの人に被爆の実態を知ってもらえるきっかけになれば」と強く願っています。

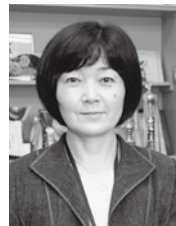


復刻した被爆体験記「夾竹桃」。西城支所・市立図書館で見ることができます



竹下さんの話を真剣に聞く児童の皆さん

美古登小学校の4年生が7月14日、竹下さんから被爆体験を聞きました。8月6日の登校日には、児童会が主催して、自分たちの学びをお互いに伝え合ったり、折鶴を折ったりして、平和に対する思いを重ねています。



美古登小学校 校長 和田眞理子さん

4年生の国語科の教材「一つの花」の授業では、教材文の読み取りと読書を並行し、平和に対する思いを広げるよう取り組みました。また、学校生活の中では、友達の気持ちに寄り添い、思いや悩みに気づいたり共有したりしてみんなで解決していくことが平和への第一歩と考えます。実体験に基づく今回のお話は、子どもたちにとって、平和の尊さや家族・友達・古里への愛を実感する貴重な機会となりました。



平田陸人くん（4年）

今でも世界では、内戦などで関係のない人たちがたくさん犠牲になっています。今回の話を聞いて、被爆された人は自分たちが思った以上に平和への思いが強いことが分かりました。戦争はしてはいけない、平和はとても大切なものだと思いました。

語り継ぐ 走り継ぐ ヒロシマの心 反核平和の火リレー



原子爆弾が投下された唯一の国ニッポン。ヒロシマ、ナガサキの体験を風化させてはならない。核のない平和な社会実現のために昭和57年（1982年）から始まった「反核平和の火リレー」。平和公園に燃え続ける「平和の灯」をトーチにともし、毎年県内全市町を多くの人が走り継いでいます。今年7月1日〜24日にかけて行われ、13日・14日には庄原市内を通過。この2日間で市内56区間を94人で走り継ぎました。



広島県青年女性平和友好祭
庄原地区実行委員会 委員長
福本敬夫さん

Interview

佐々木伸行さん
(備北交通株式会社)



戦後70年という節目の年ということで、自分たちができることから始めていくという思いのもと走りました。数多くのランナーが広島県全域を巡っていて、その1人として走れたことがうれしいです。反戦反核を願って次のランナーにトーチを渡しました。

實藤宏二さん
(社会福祉法人さくら学園)



若い世代がヒロシマの思いや被爆の歴史をもっと多くの人につなげていけたらという気持ちで走りました。トーチを渡すときに、みんなでないでいるんだという気持ちになりました。僕らは戦時の当事者ではありませんが、そういった歴史を知り、つなげていく責任があると思います。

現在も全世界で1万発以上の核弾頭があるとされています。もし、この核が使われたら何が起きるのか想像してみてください。そのことを知ってもらい、そしてみんなに考えてもらうことが大切だと思っています。私たちの取り組みは小さいものですが、核廃絶に向けてこれからも継続して取り組んでいきます。

作者 中沢啓治さんの妻 ミサヨさんからメッセージ

原爆、そして戦争というものは言葉で伝えること、そして言葉を聴いて理解することは難しいものだと思います。まして子どもたちに言葉で伝えたとしても、その悲惨さ、恐ろしさはなかなか理解できるものではないと思います。

そんな中、夫は皆が知らなかった原爆の恐ろしさ、悲惨さを言うなれば漫画の1コマで表現しました。子どもから大人までひと目見て理解できる戦争の恐ろしさを描くのが夫の生涯の目的でしたので、この漫画が描けて本当によかったと語っていました。

はだしのゲンは約40年近くの間、たくさんの世代に読まれています。これからも、はだしのゲンを通じて戦争の悲惨さ、恐ろしさが子どもたちに伝わり、平和な世界をつくることのできる若者が育ってくれることを願っています。





戦没者への追悼 平和への願い



庄原市は、戦没者の慰霊と恒久平和の願いを込めた式典を毎月8月に開催しています。この式典では、歴史認識や平和学習の機会を多くの人に広く提供したいという思いから、小学生による平和の歌の合唱や学生による吹奏楽の演奏などを行っています。

今年合唱するのは口北小学校の全校児童39人。5月中旬ごろから練習を積み重ねています。披露する曲は「ふるさと」と「小さな勇氣」の2曲。平和を願い、気持ちをひとつに心を込めて歌います。



平成27年度

庄原市戦没者追悼式 並びに平和祈念式典

本市の戦没者に哀悼の意を表すとともに、再び戦争の惨禍を繰り返すことのないよう、恒久平和を祈念するため、庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典を開催します。

多くの皆さんの参加をお願いします。(申し込みは不要です。)

とき：8月21日(金)10時～

ところ：庄原市民会館

※当日は要約筆記による案内に加え、イントラネットでの中継も行いますので、各学校、自治振興センターなどでもご覧になれます。

※各支所から送迎バスを運行します。利用希望の方は8月13日(木)までに各支所に申し込んでください。(定員に限りがありますので、ご希望に添えない場合はご了承ください。)

【問い合わせ】

社会福祉課障害者福祉係 ☎ 0824-73-1210

各支所市民生活室

※8月31日(月)～9月4日(金)市役所市民ホールで、恒久平和を祈念して、「折鶴」や「戦時中の写真などの資料」などを展示します。市役所へお越しの際はぜひご覧ください。



口北小学校
児童会長 熊谷優花さん(6年)

自分たちの歌で平和になることを願い、練習を重ねています。当日は私たちの気持ちが届くように、心を込めて歌いたいと思います。



口北小学校 校長 久保真理子さん

小さな学校ということもあり、大きい舞台上で披露することが少ないので、子どもたちにはいい経験になると思います。こうした機会に参加することで、一人一人が平和について考えるきっかけになると思います。



庄原市戦没者遺族会
会長 井澤聖昭さん

あの戦争から70年。この間日本が平和だったのは、戦争の犠牲となった人がいるおかげであることを忘れないでください。そして、戦後、犠牲者の意志を継ぎ、必死に日本のために尽くしてきた人のことも忘れてはいけません。

戦没者追悼式では多くの年代の方々が参加できる式典を開催する予定です。平和の尊さを認識するためにも、ぜひ式典に参加してください。

皆さんは、2020年開催の東京オリンピックで掲げられるという「世界一大きな絵」を制作するプロジェクトをご存知でしょうか。このプロジェクトは、世界

の子どもたちが国や宗教・人種を越えて一枚の「世界一大きな絵」を完成させることで、共通の喜びを分かち合い、世界平和に対する意識を育てることを目的に進められている

取り組みで、庄原市からは東城小学校が唯一参加しています。絵の題材にしたのは、東城の伝統行事「お通り」。6年生が案を出し合って決めました。図柄は5枚の布を縫い合わせた5メートル四方の布に、母衣を身に付けた少女を大きく描き、周囲には東城の四季や雄橋などを配置しています。作成には全校児童257人が関わり、母衣はみんなの手形をつけて表現しています。約2カ月かけて完成させました。

「平和というテーマは大きいですが、まずは自分たちの地域を愛する気持ちが大切です。東城を象徴するお通りが、



郷土を愛する心が世界平和を願う心を育む 東城小学校が取り組んだ「世界一大きな絵」



児童一人一人の手形で母衣を描く。布の縫合は6年生の保護者が協力した。

子どもたちの郷土を愛する気持ちに結び付いていて、完成した絵からもその気持ちが伝わってきます」と話すのは西田早苗校長。絵を縫い合わせる作業では6年生の保護者の協力もあり、「この取り組みでみんながひとつになれた」と喜びます。

Interview



東城小学校 校長 西田早苗さん

お通りという伝統行事が続いているのは、平和だからこそ。そのことを子どもたちにも伝えていきます。お通りが続くことで平和が広がっていく。平和というテーマは大きいですが、子どもたちは地域を愛する気持ちで取り組んでくれました。



東城小学校 児童会長
高浦好花さん(6年)

世界中の人に東城という小さな町を知ってもらいたい。お通りがずっと続いているように、世界も平和になってほしいです。